

家族アセスメントインベントリーの作製

—家族の機能状態の把握—

西出 隆 紀

1. 問題と目的

人は社会的文脈の中で生きており、個人を理解するにはその人を取り巻く社会システムを考慮にいれねばならない。その中でも特に重要なものの一つが家族である。従って、家族を知ることは今後ますます必要になってくると言えよう。

わが国と比べてかなりの進歩を見せている米国の家族システム研究は、現在2つの方法が主流になっている。1つは観察法で、例えば Steinglass, P. (1979) の HOAM (Home Observation Assessment Method) のような行動評定・記述法がよく利用されている。もう1つは家族システムの機能状態を測定する質問紙法で、Moos, R. & Moos, B. S. (1976) の FES (Family Environment Scales), Bloom, B. L. (1985) の FFS (Family Functioning Scales) などが作成されているが、この種の質問紙で一番よく利用されているのが、Olson, D. H. ら (1979) の FACES (Family Adaptability and Cohesion Evaluation Scales) である。彼らは、家族療法家などが主張した家族機能に関する様々な指標を「凝集性」、「適応性」の2次元にまとめ、「もっとも機能的な家族は、両次元の中間域に位置する」という二次曲線関係を重視した。彼らは他に、「機能的な家族は良好なコミュニケーションスキルを有しており、成員はその状態に満足している」という仮説も持っている。彼らの家族機能モデルは「円環モデル」と呼ばれ、理論と実践をつなぐ試みとして注目を集めている。この円環モデルの概念を操作可能にしようという意図で作成されたのが、FACES である (Olson, D. H. ら, 1979, 1985, 1986)。

質問紙法は、家族にあまり負担がかからず、観察法より情報量は劣るものの、家族の協力は比較的得られやすい。また、測定する変数等をしっかりと定めておけば、かなり有益な知見を呈すると思われる。わが国でも徐々に家族アセスメントに対する関心が高まっており、このような長所を持つ質問紙法の検討がなされている。しかし、海外のものを翻訳しただけで、信頼性・妥当性を検討していないものや、それらを検討するのに大学生を調査対象とする「家族なき家族研究」の誤りを犯しているものがほとんどである。

そこで、本研究では、家族アセスメント用具の1つとなる、家族システムの機能状態を把握するための質問紙を作製し、その信頼性・妥当性を検討することを目的とする。また、将来的にはこの質問紙を家族アセスメントバッテリーに組み込むことを考えており、家族アセスメント研究の礎石の役割を果たすものと位置づけたい。

2. 研究 I 家族アセスメントインベントリー (以下 FAI と略記) の作製

① 予備調査

a. 目的 家族に関するさまざまな質問紙を参考にして作った親用・子ども用各61項目の中で不適切なものがないか検討をする。なお、家族発達段階を考慮するために、今回は中学生を持つ家族を対象を限定する。

b. 方法 10月上旬から中旬にかけて、国立N中学校の生徒とその親を対象に質問紙を教室で配布し、家庭で記入したものを再び生徒が持参する形で回収した。分析の対象となった家族は227家族であった。

c. 結果と考察 項目毎に得られた反応分布を見て、反応拒否が多かった項目、分布に不適切な偏りが見られた項目をピックアップした。これらは反応しにくかったり、表現に不適切な部分があったと考えられるので、削除もしくは表現の変更を行った。また、父・母・子どもに分けて因子分析を行い、共通性が低い項目も削除・表現変更の対象とした。その結果、親用・子ども用とも15項目を削除し、表現変更は前者2項目、後者4項目となった。また、因子分析の結果から、項目の補充が必要と考えられる因子に関する項目を親用・子ども用とも7項目ずつ加えた。そして、最終的には53項目の質問紙が出来上り、これを調査 I に用いることにした。

② 調査 I

a. 目的 予備調査の結果から得られた53項目を用いて質問紙調査を行い、項目群がどのような因子構造になっているかを確認し、更に特定の因子に対して因子負荷が高く、内容的にも家族アセスメント上重要な情報をもたらす項目を選出して、30項目程度の家族アセスメント目録を作製する。

b. 方法 11月上旬、愛知県内の市立C中学校の生徒とその親を対象に質問紙を教室で配布し、家庭で記入したものを再び生徒が持参する形で回収した。分析の対象と

なった家族は524家族であった。

c. 結果と考察 項目毎に得られた反応分布から、問題のある偏りも特になく、反応拒否が極端に多い項目もないことがわかり、予備調査の段階で不適切な項目を排除した効果が見られた。因子分析は父・母・子に分けて行ったが、三者とも「家族に対する評価と凝集性」、「家族組織の柔軟性・構成度」、「家族内の秩序・ルール」、「親密で自由な家族内交流（良好な家族内コミュニケーションに相当）」の4因子が抽出された。「家族に対する評価と凝集性」の項目群は、内容から判断して「家族に対する評価」と「家族の凝集性」に分けられた。3相データの階層的な主成分分析（村上，1990）の結果、父親と母親の因子構造がほぼ同様であることが示されたため、調査Ⅱ用の項目選出に際しては、父親・母親両者とも同じ因子に含まれている項目をまず採用し、項目の内容や α 係数を参考にして各因子の項目群を作成した。子ども用は、因子負荷・項目の内容・ α 係数を参考に各因子の項目群を作成した。項目数は親用、子ども用とも全体で30項目になり、これを調査Ⅱに用いることにした。なお、各因子の項目群の α 係数は親用が.658～.879、子ども用は.678～.803で、両者とも各因子の項目群における内的整合性に問題はないと言える。

③調査Ⅱ

a. 目的 調査Ⅰの結果から得られた5つの項目群からなる30項目の信頼性・妥当性を検討する。また、各因子の項目群の平均点や標準偏差を父・母・子どもの3群それぞれでとり、これらを解釈の際に参考にする標準値とする。

b. 方法 12月上旬、愛知県内の市立I中学校の生徒とその親を対象に質問紙を教室で配布し、家庭で記入したものを再び生徒が持参する形で回収した。分析の対象となった家族は417家族であった。なお、妥当性検討の為に「家族強度尺度（Olson, D. H. ら, 1985）」12項目を質問紙に加えた。これは家族のストレス耐性を測り、家族の機能状態の指標となる。

c. 結果と考察 父・母・子どもに分けて因子分析を行った。父親に関しては、調査Ⅰとほぼ同一の因子構造が見られた。母親・子どもの方では、特定の反応セットの影響などで、予想された因子とは別の因子により高い負荷を示す項目も見られたが、大まかにみればほとんどの項目が予想された因子に高く負荷していた。各項目群の α 係数は.594～.859で、ある程度の内的整合性を各項目群とも有していると言える。

Olson, D. H. ら（1985）の円環モデルに従えば、「家族の柔軟性・構成度」、「家族の凝集性」、「家族内の秩序・ルール」の項目群得点が中間域にある家族の家族

強度得点が最も高くなり、「家族に対する評価」、「親密で自由な家族内交流」の項目群得点は家族強度得点と正の相関を示すと予想されたが、結果的には父・母・子どもの3群とも、全ての項目群得点が家族強度得点との正の相関(.462～.791)を示し、前者の仮説は支持されなかった。これについては前者の3項目群の高得点が意味する内容の問題が影響しているものと思われる。しかし、感想欄に家族の記述が多かった特徴的な3家族の個別分析では仮説に沿った結果が出ており、正常家族と問題を抱える家族とでは、項目群得点の持つ意味が異なることも考えられる。Olson, D. H. (1986) も正常家族の調査で、「本来家族機能と二次曲線的関係である凝集性・適応性は正常家族では直線関係を示す」として、問題家族との質的な違いを指摘している。この点の確認は今後の課題の中心となってこよう。

3. 研究Ⅱ 家族アセスメントインベントリーを用いた事例検討

a. 目的 研究Ⅰで作製されたFAIを臨床事例に適用し、事例の家族の状態像とFAIの得点傾向が一致するかという点とFAIの臨床事例への適用の可能性を検討する。

b. 方法 月に数回の不登校を主訴とする事例Ⅰ、及び、登校拒否を主訴とする事例Ⅱの家族にFAIを実施し、事例担当者の述べた家族の状態像と一致するかどうかを確認した。

c. 結果と考察 両事例とも家族の状態像とFAIの得点との間に十分な対応関係があることと事例の家族理解や治療的介入にFAIの結果が利用できること、そして、成員間の得点差がその家族の問題をかなり反映していることが確認された。このことから、臨床事例の家族システムの機能状態を知る際に、FAIは有益な情報をもたらすと考えられる。

4. 全体的考察と今後の課題

まず、FAIの信頼性・妥当性の問題であるが、信頼性に関しては、内的整合性に問題が殆どないことは確認されたが、今後、再検査法などを用いて結果の安定性に関する検討を行わねばならぬと思われる。また、妥当性に関しては、観察法の結果との比較による検討がなされねばならないであろう。次に、成員間回答差の扱いの問題があるが、個別事例の解釈については、回答差を解釈に生かすべきである。集団調査の場合はこれを処理する統計手法が必要となってこよう。そして、FAIとバッテリーを組むようないくつかの家族アセスメント用具を開発し、多面的、総合的に家族アセスメントを行うことが今後の最大の課題と言える。